

台風が過ぎれば今年の梅雨は終わり？

暑い暑い日が続く、ブドウ糖・荒塩の活用を

台風が過ぎ去れば今年の梅雨は終わりと思われる。となれば、いよいよ夏に突入。暑い日が続くことになる。今年、現場での熱中症を防ぐために、ブドウ糖と、荒塩を準備している。

人は汗をかくことで体温を下げる。だから水分の補給は欠かせないが、ただの水ではすぐに体内に吸収されない。極少量の塩を含んだ水の方が吸収が早い。(塩がきつすぎると喉が渇くだけで逆効果)。

ブドウ糖は体内への吸収がもっとも早い糖分、エネルギー源だ。

各人それぞれの体調を、自分で判断しながら、水分補給、ブドウ糖・荒塩の活用をおこない、熱中症予防を心がけてもらいたい。

暑い夏の夜は寝苦しく、睡眠不足になりがちだ。睡眠不足の状態、日中の暑いさなか仕事をするとう熱中症にかかりやすい。(前日の酒が残っている状態でもそうだ)。

しかし、野宿していると十分な睡眠はとりにくい。暑さのせいで寝苦しいだけではなく、襲われる心配もあるからだ。

毎週土曜日夜回りを続けている「野宿者ネットワーク」が、一番最近確認した襲撃事例を、ホームページで公開し、野宿生活者の上に覆い被さる苦難の一端を、多くの人に伝えようとしている(下段参照)。

苦難は多く、良好な体調を維持することは困難と思うが、投げやりになると、死が近づいてくる。少ない福祉資源の活用で乗りきろう！

7月6日の夜回りで確認 日本橋西方面 野宿していた仲間の数は181人 3～4日前の夜2時頃、日本橋住宅で若者何人かが乗った灰色の乗用車から花火襲撃。

月曜の夜2時頃、道具屋筋で若者が乗った車から花火を首筋に打たれ、火傷を負う(下の写真)



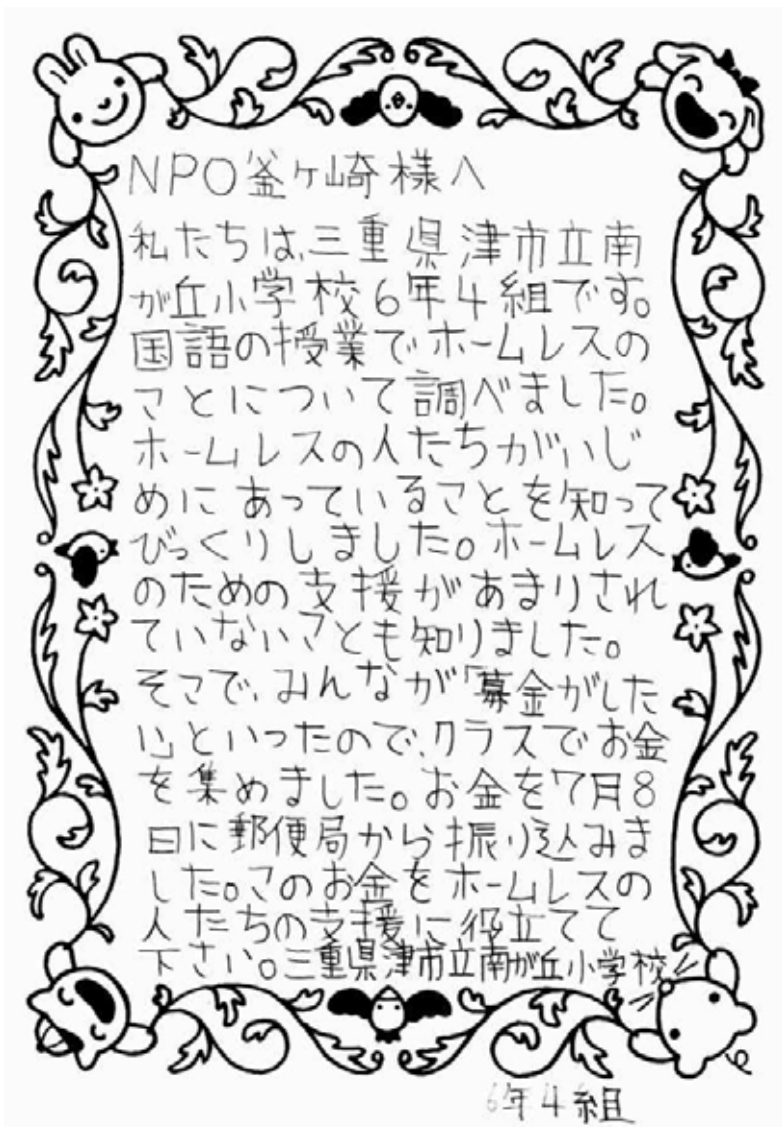
写真中黒線で囲んだ範囲が花火で撃たれた火傷。

情報提供:野宿者ネットワーク:ホームページで公開

襲撃もあれば応援もある。伝えることで応援を増やす

日本橋で野宿を余儀なくされている仲間に対して、若者による花火を使っでの襲撃が頻発している一方で、三重県の小学生からは、野宿生活者について「勉強」した上で、応援の手紙とカンパが寄せられている。有難いこと

だ、と思う。



多分、南が丘小学校6年4組のこどもたちは、日本橋での襲撃や野宿生活の先を見通せる有効な対策が打ち出されていないことなどを学んだのだと思う。

小学生ですら、と書くと、南が丘小学校の生徒に失礼に当たるが、いわんや大の大人が事実を知れば、もっと応援の声や支援が増えるはず、と、考えるのが普通の判断であろう。

野宿生活者に理解を

野宿者の自立を指す

NPO(特定非営利活動)

法人「釜ヶ崎支援機構」

が、広報誌「NPO釜ヶ

崎通信」の発行を始めた。

今月から西成区役所にも

置かれている。労働者の

町として知られるあいら

ん地区(西成区)ではこ

こ数年、日雇い労働の求

人数がバブル最盛期の3

分の1に落ち込んだま

ま。厳しい雇用情勢のな

かで高齢化も進み、将来

を見据えた野宿者対策が

求められている。同機構

は「広報誌を通じ、まず、

野宿者の生活状況を理解

してほしい」と話してい

る。

同機構は大阪市から

「野宿生活者能力活用事

業」を委託され現在、地

域の労働者9人に、自転

車や靴修理の技術を指導

する講習をしている。広

NPOが広報誌を発行

釜ヶ崎支援機構 技術取得の姿も紹介

報誌には、「野宿から社

会再参入を目指して」と

題し、労働者が技術取得

による自立を目指す取り

組みを、写真とともに紹

介している。広報誌は市

健康福祉局を通じて、各

区役所に送られている。

西成労働福祉センタ

によると、日雇い労働の

求人数は、バブル最盛期

の89年に年間約187万

人だったが、98年には約

58万人まで落ち込み、最

近は60万人台で推移して

いる。雇用保険手帳を持

つ労働者に限ると、平均

年齢は約55歳となり、居

住環境の確保や、医療・

介護を含めた野宿者対策

が求められている。同機

構の松繁逸夫事務局長は

「30年先を見据えた街づ

くりを今、考えたい」と

話している。

【田中謙吉】

予算の関係で多くは配布できないが、理解者を増やすために広報誌をこしらえ、大阪市内全区役所の市民情報コーナーに置くことになった。(毎日新聞・2002年7月10日・大阪朝刊)